OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	感情語の意味解釈における文化的背景と身体性の相互作用ーベトナム語のgiậnとthươngの分析を例にー
Author(s)	Doan, Ngoc Minh Tran
Citation	大阪大学, 2026, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105325
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　　名	（DOAN NGOC MINH TRAN）
論文題名	感情語の意味解釈における文化的背景と身体性の相互作用 ―ベトナム語のgiậnとthương の分析を例に―

論文内容の要旨

本稿は、ベトナム語の感情語 giận と thương を対象とし、Langacker（1987, 2008）の意味論におけるドメイン概念と、Levinson（1996）の空間認知理論における相対枠を理論的枠組みとして用い、両語の意味構造の特徴を解明することを目的とする。

従来の感情研究（Lakoff and Kövecses 1987、Kövecses 1991・2000；Wierzbicka 1986、1992a、1992bなど）には、大きく二つの方向性が指摘されている。第一に、メタファー理論（Lakoff and Kövecses）は英語を中心に普遍的モデルを構築し、生理的基盤を優先する傾向が強い。第二に、WierzbickaのNatural Semantic Metalanguage（NSM）理論は、簡約化された基本的意味素を用いて感情語の意味スクリプトを記述する枠組みであり、記述を簡潔に行うことができるとともに、当該語の特徴を明確化できるという利点をもつが、体系が閉じて抽象度が高く、語用的多様性を捉えにくいという問題が指摘されている。

特に、ベトナム語の感情語は対人関係・視点の取り方など、文脈依存性の高い要因が意味構造に深く影響する。本研究は、既存モデルを前提としつつ、複数の認知ドメインの相互作用と視点の共有可能性に着目することで、感情語の概念化をより多角的に記述するための観点を示すことを目指す。

本稿は、第1章から第8章までの全8章で構成される。第1章では研究の目的と全体構成を述べた上で、本研究が扱う4つの主要論点、すなわち(1) 感情語の意味解釈における文脈の重要性、(2) 対人関係の捉え方に基づく感情語の使用制約、(3) 関連概念の中心性に見られる言語間差、(4) 文化固有の共感観の特徴を簡潔に整理する。これらの論点は、英語中心の枠組みでは十分に扱われてこなかった問題であり、ベトナム語の感情語を分析する上で不可欠な視点である。

第2章では、心理学・文化心理学・認知言語学における先行研究を整理し、感情の概念化を生理的プロセスに基づいて説明する Lakoff and Kövecses（1987）、Kövecses（1991、2000）のメタファー理論と、普遍的意味素によって感情の意味を抽象化する Wierzbicka（1986、1992a、1992b）の NSM 理論を取り上げる。これらの研究は英語の感情語モデルを精緻に描き出した一方で、対人関係を含む状況解釈が十分に考慮されていないこと、感情に伴う行動意図が一つの型へと単純化されやすいこと、モデルの前提が西洋文化の理解に偏りやすいこと、意味構造が抽象化されすぎることで言語ごとの感情の概念化の仕方の違いが見えにくくなることの4つの限界が指摘されている。ベトナム語の giận と thương は、関係性や視点の選択などの要因によって使用や解釈が影響を受けるため、精緻に記述するには既存モデルを補完する視点が必要であることを示す。

第3章では、Langacker（1987、2008）のドメイン理論に基づき、感情をドメイン・マトリックスとして捉える枠組みを整理し、感情が単一の心理状態ではなく、「対人関係」「文化・社会的評価」「出来事の解釈」など複数の認知的背景が関与する多次元的概念であることを示す。

また、Levinson（1996）の空間認知理論（相対枠）に基づき、話者がどの立場から状況を理解するか（自己志向・相手志向など）という視点の取り方が、感情の成立と解釈にいかに影響し得るかに着目する。本章では、以上の議論を踏まえ、後続章の分析の核となる「複数ドメイン」と「視点」という二軸の理論的枠組みを位置づける。

第4章から第7章は本稿の本論に当たる。第4章では、論点(1)である「感情語の意味解釈における文脈の重要性」に焦点を当て、自由記述調査・文完成課題・コーパスデータを通して、ベトナム語 giận と英語 angry の使用文脈を比較する。怒りに関する先行研究では、Lakoff & Kövecses（1987）を中心とするメタファー理論のもと、怒りが普遍的な身体反応にもとづく概念として捉えられ、英語を中心に多くの研究（Matsuki 1995、Yu 1995など）が内部圧力の上昇や爆発といった身体反応のプロセスに注目する傾向が見られる。一方で、怒りがどのような対人関係・状況のもとで成立し、誰に向けられやすいのかといった語用的側面は比較的十分に検討されていない。

本章では、この課題をふまえ、収集した文脈に基づいてangry と giận の語用的特徴を検討する。その結果、分析した文脈では、angry は望ましくない出来事の評価にもとづき幅広い対象に向けられやすいのに対し、giận は、親しい関係にある相手だからこそ生じる感情であり、相手の言動や期待の破れに敏感に反応して、身近な相手に向けられやすい傾向が確認された。さらに近接語句にも違いが見られ、angry では攻撃・復讐を示唆する語句が共起しやすく、giận では心配・関係修復といった関係志向の意味をもつ語句が共起する場合もあることが確認された。すなわち、両語はいずれも望ましくない出来事に対する感情であるものの、その状況の解釈仕方が異なる可能性が示唆される。

第5章では、論点(2)である「対人関係の捉え方に基づく感情語の使用制約」を扱い、英語 angry とベトナム語 giận の使用に見られる制約を比較する。行動意図に関する先行研究では、Wierzbicka によるNSM 理論のもと、angry は「悪い行為を受ける→不快感を抱く→相手に対処行動をとりたくなる」という直線的な構造をもつ感情として記述されてきた（Wierzbicka 1992a）。しかし、このモデルでは、「怒り」を表すベトナム語 giận が、怒りの後続反応であるにもかかわらず相手への配慮を示す行動と結びついて用いられるという、一見矛盾した現象を説明できない。

本章ではこの課題に対し、angry と giận の使用を対人関係の捉え方と結びつけて検討する。angryは出来事や被害の評価を起点とし「自分vs相手」という個人関係の枠組みで捉えられやすく、対立的な行動へ展開しやすいのに対し、giận は「大切な人なのに、なぜそんなことをしたのか」「どうして一人で抱え込んで、言ってくれなかったのか」「なぜ無理をしたのか」といった親密な関係のずれを起点として生じ、第4章で扱った関係性の捉え方がその意味構造に直接影響する。その結果、例えば、表面的には叱責であっても、その背後に相手への思いやりや保護的意図が含まれる場合が多い。こうした差異は、英語の angry が「個人対個人関係」を前提とし、ベトナム語の giận が「親密な関係」を前提とするという概念化の方向性の違いを反映している。

第6章では、論点(3)である「関連概念の中心性に見られる言語間差」を扱い、自由記述調査・文完成課題・コーパスデータを通して、英語loveとベトナム語 thương の使用文脈を比較する。「愛情」に関する先行研究では、Kövecses（1991：2000）を中心とするメタファー理論の枠組みにおいて、英語のモデルは liking（好ましさ）やaffection（優しい思い）といった中心的関連概念を核とし、そこから caring（思いやり）やrespect（尊敬）などの周辺的概念へ連続的に広がるネットワークとして捉えられてきた（Kövecses 1991：86–88；2000：125）。しかし、こうした

関連概念の構造が他言語にも同様に適用できるのかという点については、これまで十分に検討されてこなかった。

本章では、収集した文脈に基づき英語の love とベトナム語の thương における愛情が誰に向けられ、どの側面が中心化されるのかを比較する。英語では、相手の魅力・価値・好ましさといった肯定的属性が感情の根拠として前景化されやすいのに対し、ベトナム語では、困難や負担を抱える相手の弱さに寄り添うことが thương の成立基盤として示されやすい。また、この違いは使用範囲にも現れ、love が主として親しい相手に向けられるのに対し、thương は親しい相手に限らず、親密でない相手や不特定多数にも向けられうる。すなわち、両語はいずれも「相手を大切に思う感情」を表す点で共通するものの、中心となる関連概念と対象の捉え方には違いが見られる。

第7章では、論点(4)「文化固有の共感観の特徴」を扱い、ベトナム語 thương に見られる共感の核心的特徴を検討する。先行研究として取り上げた NSM 理論は普遍的意味素によって感情語を抽象化する枠組みであるため、文化固有の感情解釈を十分に捉えきれない問題がある。特に、「相手に悪いことが起きた→自分も同様に悪く感じる」と表す NSM の枠組みでは、thương に見られる「相手の痛みを自分の内側の傷として受け取る」という文化性を伴った共感の性質を十分に説明できない。さらに相手の喜びの背後にある痛ましさに反応して用いられる場面も NSM のモデルでは矛盾なく記述できないため、その限界が明確となる。

本章では、こうした課題に基づき、thương の語源である「傷」に着目し、その意味が「相手の痛ましさを自分の内側に引き寄せて捉える共感」へと拡張してきた過程を整理した。さらに、Levinson（1996）の空間認知の理論を用いて、日本語の「心が痛む」と比較することで、thương が観察者として外側から相手の状態を評価するのではなく、話者が相手の視点・位置に立ち、相手の感じている痛みを自身の感覚として共有するという視点共有型の共感として概念化される点を示す。

第8章では、本研究の成果として、複数ドメインと視点選択を統合する分析が、従来の英語中心モデルでは捉えきれなかったベトナム語の感情語の特徴を明確に描き出せることを示す。感情語の分析において、対人的文脈やその背後にある文化的概念など複数の側面を取り込む意義を示し、今後の課題についても言及する。本稿の議論が持ち得る意義としては、主に以下の二点が挙げられる。第一に、ベトナム語の giận や thương の分析から、感情語は生理反応を超え、対人関係の捉え方や視点選択などの多面的な構造をもち、その多面性が文化的概念化を反映するため、単一モデルでは文化ごとの特性を十分にとらえることは難しい点、第二に、感情を複数のドメインが重なり合うドメインマトリックスとして概念化する立場をとることで、身体反応・対人関係・文化的価値観といった諸要素をそれぞれのドメインとして位置づけ、これらが意味形成にどのように関与するのかを一つのモデルに固定されることなく柔軟かつ精緻に記述できる。さらに各ドメインの特性を手がかりとして通言語的な比較にも応用できる点にある。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名	（ Doan Ngoc Minh Tran ）
	（職） 氏 名
論文審査担当者	主 査　教授　田村幸誠 副 査　教授　大森文子 副 査　准教授　中嶌浩貴

論文審査の結果の要旨

本博士論文は、ベトナム語の感情表現（主に giận および thương）を対象とし、認知言語学の枠組み（Langacker（1987, 2008）、Levinson（1996））に基づいて分析を行ったものである。感情の言語表現に関する研究は、認知言語学においては Lakoff & Kövecses（1987）に端を発し、主としてメタファーの観点から多くの分析が提案されてきた。また、文化的側面を重視した意味分析としては、Wierzbicka による NSM（Natural Semantic Metalanguage）理論を用いた通言語的研究が広く知られている。さらに、心理学・文化人類学の分野では、ポール・エクマンによる基本感情の類型化が基礎的研究として位置づけられている。本博士論文は、これらの先行研究を踏まえつつ、従来提案されてきた感情分析のモデルが、英語や西洋語を中心とした言語観に強く依拠している可能性を研究上の争点として提示する。そして、ベトナム語の感情表現を詳細に分析することを通じて、既存のモデルでは感情表現の意味構造を十分に捉えきれない側面が存在することを指摘する。特に、ベトナム語の感情表現が、話者間の関係性や出来事に対する視点の取り方によって大きく意味解釈を異にする点に着目し、こうした要因を体系的に取り込む記述モデルの必要性を示すものである。

本稿は、全8章から構成され、ベトナム語の感情語 giận および thương を中心に、感情語の意味構造を認知言語学の観点から分析している。第1章では研究の目的と全体構成を示した上で、(i) 感情語の意味解釈における文脈の重要性、(ii) 対人関係の捉え方に基づく感情語の使用制約、(iii) 関連概念の中心性に見られる通言語的差異、(iv) 文化固有に現れる特徴という4つの主要論点が提示されている。これらはいずれも、英語中心の既存研究では十分に扱われてこなかった問題であり、ベトナム語の感情語を分析する上で不可欠な視点として提案されている。

第2章は先行研究の整理に当てられている。Lakoff & Kövecses によるメタファー理論および Wierzbicka の NSM（Natural Semantic Metalanguage）理論が取り上げられている。感情語の意味構造を体系的に記述することを目的とする一方で、これらの理論では、対人関係を含む言語使用状況が十分に考察対象の中に入っていないこと、そして、感情に伴う行動意図がシンプルな因果関係で捉えられがちであること、そして、多くの場合において、その理論的前提が西洋語・西洋文化に依拠したものであるのではないかという問題点を指摘する。本稿は、ベトナム語 giận および thương の分析を通じて、こうした問題が分析の具体的な躓きとして現れることを指摘する。第3章は本論文における理論的枠組みが概観されている。主に、Langacker（2008）のドメイン理論に基づき、感情を単一の心理状態ではなく、「対人関係」「文化・社会的評価」「出来事の解釈」など複数の認知ドメインが関与するドメインマトリックスとして捉える枠組みが提案されている。加えて、対人関係を捉えるモデルとして、Levinson（1996）の空間把握のモデルが紹介され、特に、感情表現においては、相対的視点枠の観点を記述に取り込む必要があることが議論されている。話者がどの視点から状況を捉えるかという視点選択が、感情の成立および解釈においても大きな影響を及ぼす事実を理論的にサポートしようとし

ている。

第４章以降、具体的な例文、コーパス調査、アンケート調査を用いてベトナム語の感情表現の特徴とその通言語的含意を実証しようとしている。第4章および第5章では、英語 angry とベトナム語 giận を比較し、怒りの概念化に見られる語用的差異が検討されている。分析の一つの結果として、angry は望ましくない出来事の評価を起点として比較的広い対象に向けられやすいのに対し、giận は親密な関係にある相手への期待のずれや配慮と結びついて生じ、身近な相手に向けられやすいことなどが例文やコーパス調査、アンケート調査をもとに導かれている。giận は表面的には叱責的であっても、その背後に相手への思いやりや関係維持の意図を含む場合が多く、両語の概念化の方向性の違いが議論されている。

第6章および第7章では、英語 love とベトナム語 thương を比較し、愛情概念における関連概念の中心性および話者と聞き手の共感のあり方が検討されている。英語では相手の魅力や価値といった肯定的属性が感情の根拠として前景化されやすいのに対し、thương は困難や弱さを抱える相手に寄り添うことを成立基盤とする点が特徴的であるという主張を行い、そのことに関して具体的なデータとともに議論を行なっている。その説明過程において、ベトナム語では（thương） 話者の視点を相手側へ移動させ、相手の痛みを自身の感覚として共有する「視点共有型の共感」が愛情の言語表現において非常に重要な働きを持つことが論証されている。

第8章はまとめに当てられている。本研究の成果として、複数ドメインと視点選択を統合する分析が、従来の英語中心モデルでは捉えきれなかったベトナム語感情語の特徴を明確に描き出せることが述べられ、感情語が生理的反応を超え、対人関係や文化的価値観と密接に結びついた多面的構造をもつことが振り返られ、今後の通言語的な感情研究の発展に対する理論的示唆が行われている。

本博士論文は、ベトナム語の感情語 giận および thương を対象とし、認知言語学の理論的枠組みに基づいて感情語の意味構造を多角的に分析したものである。感情語研究は、従来、英語を中心とした分析モデルに依拠する傾向が強く、感情を主として生理的反応や個人的評価の側面から捉えてきた。本論文は、こうした研究状況を的確に踏まえた上で、話者間の対人関係や出来事に対する視点選択といった要因が感情語の解釈に与える影響に着目し、ベトナム語の具体的な言語データに基づいて精緻な分析を行っている。特に、giận と英語 angry、thương と love との対照分析を通じて、感情語の意味が単なる情動反応としてではなく、関係性の捉え方や文化的価値観を反映した概念構造として成立していることを明らかにした点は評価できる。giận が親密な人間関係における期待や配慮と結びついて用いられる点、また thương が相手の困難や弱さに寄り添う共感を基盤とする点の指摘は、英語中心の既存モデルでは十分に説明されてこなかった側面に新たな光を当てるものである。さらに、本論文は Langacker のドメイン理論および Levinson の視点枠を統合的に用いることで、感情語を複数の認知ドメインが重なり合うドメインマトリックスとして捉える理論的枠組みを提示している。この枠組みは、感情語研究においてしばしば分断されがちであった身体反応、対人関係、文化的概念といった諸要素を一つの分析視野の中に位置づける点で意義深い。また、分析の対象や方法も一貫しており、博士論文としての理論的成熟度および研究遂行能力の高さがうかがえる。今後の研究の課題として、本博士論文では、感情表現のごく一部が取り上げられているため、感情表現がどのように全体として、各言語において有機的につながっているのか分かりにくいということが指摘された。今後、「怒り」以外の感情表現にも同じモデルが適用できるのか、通言語的にはどのような違いがあるのかを実証していく課題が残る。また、love や thương に関しては日常での言語使用の分析にとどまっているため、より深い宗教も含めた文化的理解には達していないという指摘もあった。これも先の課題と同様に、本博士論文で提案された視点がどの程度妥当なものであるのかを文学作品や歴史的議論（文化的変遷）も含めて考察していく必要があると考えられる。どちらも大変大きなテーマであり、研究には大変な時間がかかることが予想される。その一方で、本博士論文は十分にその出発点となりうるものであると判断できる。

以上より、本博士論文は、感情語研究および認知言語学の分野において、通言語的比較の可能性を広げる有意義な成果を示しており、学術的にも一定の貢献をなすものと評価できる。博士（言語文化学）の学位論文として価値のあるものと認める。